

障害者の文化芸術を支える拠点等のあり方に関する検討懇話会 第2回会議(令和2年(2020年)9月10日開催) 議事録

- ◆ 日 時 : 令和2年(2020年)9月10日(木) 14:00 - 17:00
- ◆ 開催場所 : やまなみ工房 STUDIO&ATELIER&CAFÉ 4階 STUDIO DECO
- ◆ 出席者 : 【委員】
太下委員(座長)、大澤委員(副座長)、北村委員、鈴木委員、
谷委員、田端委員、中崎委員、廣部委員、山下委員
【事例報告者】
大塚千枝氏(厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部企画課
自立支援振興室障害者芸術文化活動支援専門官)
長津結一郎氏(九州大学大学院 芸術工学研究院
コミュニケーションデザイン科学部門 助教)
村尾剛志氏(丸亀市産業文化部文化課市民会館建設準備室長)
【事務局】
〈文化スポーツ部〉村田 理事(文化担当、近代美術館長)
〈文化芸術振興課〉田村 課長、千秋 主幹(振興係長)、見野 主査
〈健康医療福祉部〉
〈健康医療福祉部〉石田 課長補佐(社会活動係長)
【オブザーバー】
公益財団法人びわ湖芸術文化財団職員
- ◆ 議 題 : (1) 「場」づくりの取組を進める事例について(事例紹介及び質疑応答)
(2) その他

◆ 発言録

開会にあたり、やまなみ工房施設見学を実施

(千秋係長)

開会案内

(村田理事)

開会あいさつ

(千秋係長)

事務局出席者 説明

資料確認、等

(千秋係長)

ではここからは、太下座長に議事進行をお願いします。

(太下座長)

では、議事に入ります。

障害者の文化芸術活動を支える拠点のあり方等を検討するための懇話会での議論の進め方や、懇話会設置に至るこれまでの経緯や議論について、事務局からの説明をおねがいします。

(大塚氏)

～厚生労働省「障害者芸術文化活動普及支援事業」にかかる報告～

(田端委員)

～滋賀県の障害者芸術文化活動支援センター事業について報告～

(村尾氏)

～丸亀市「(仮称) みんなの劇場整備事業」にかかる報告～

(長津氏)

～「演劇と社会包摂」制作実践講座にかかる報告～

(太下座長)

ではここからは、やまなみ工房の見学や事例報告者からの事例を踏まえ、資料5にもあります誰もが文化芸術活動を楽しめる拠点や支援する人が集える拠点となるにはどんなことが必要で、どう取り組めばよいかを委員の皆様、また、事例報告をされた皆様からもご意見を頂戴したいと思います。

(大塚専門官)

村尾さんの発表をお聞かせいただき、すごいなと感じました。

劇場の関係者は、劇場の事業運営だけで精一杯で、なかなか外へアプローチしていくことはできないものです。

また、作っている作品を一部の人に認められて喜びを感じている場面が多くあります。地域の劇場というものは、その地域にとってこの施設があってよかったんだと感じていただくことが必要であるということが大事であるという考えに立てば、これからの劇場

の在り方を今日の村尾さんの事例を聴いていると答えが見えてくるような気がしています。

つまりは、劇場に近い人だけでなく、劇場から遠い人たちの意見を細かく聴取されることで、「誰もが」という視点を大事されながら開かれた劇場づくりに取り組むという姿勢が市民に伝わるのではないかなと感じているところです。誰が、何を必要としているのかを探しに行かなければいけないのだと思います。

(大澤委員)

お話を聞きながら、「場」や「拠点」の機能に考えてみました。

先ほど長津先生が「人」ということに集約されるという話がありましたが、その人にどういう資質や経験が必要で、そういう人がどうすれば能力や資質を發揮できるか、ということ丁寧に考えなければいけないのではないかと感じます。

あくまで、建物という場が必要ではないということを前提にして、人が必要であると。その人をどう生かしていけるのかということを考える必要があると思います。

あと一つ。村尾さんの発表にありました必要な資源について。人、金、もの、情報、空気感、関係性ということが大事だと感じました。特に関係性。人材・ネットワークということがよく言われるが、どんなネットワークが必要なのかということをもっと掘り下げて考えないといけないと感じています。どんな関係性をどうやって作っていくのかということが「場」や「拠点」を考える上では大変重要になるのではないのでしょうか。

(北村委員)

私も「場」づくりを考えるうえでは、どんな関係性をつくっていくかを考えることが重要だと感じています。

今日の事例報告の中で、村尾さんの発表にもありました、劇場に行きたいと思っていない人の意見をこまめに聞くことで、そこから劇場の必要性を構築していくという事例が衝撃的でした。

私は障害のある人たちと十数年一緒に活動をしており、当事者の意見として劇場に対し、こういうことが必要だといった意見やこういう人たちとつながりたいという思いは多くありますが、その考えを受け止める側の方たちの思いついては、あまり想像してこなかったなと考えさせられました。

(太下座長)

以前、ある公立文化施設の存在意義についての話があり、入館者数を増やそうという議論があった。

実際、その施設の展示物に関心がない住民が関心のある住民に比べ、圧倒的に多いわけです。

一方で、自分に関心がなく一人ではいけないが、孫と一緒にいくと楽しい等の理由で、自治体が施設を所有し経営していることを静かに許容している人がどれくらいいるのかという観点が大事なのではないか、という意見もあります。劇場を含め、文化施設にはそうした目に見える結果だけではない価値というものも大事にしていく必要があるのだと感じています。

(鈴木委員)

障害者芸術活動普及支援事業についてはビッグ・アイでも取組を進めていますが、障害のある方にとって良い変化をもたらしたいと。

劇場でモノを創るにあたって、劇場にどういったことが求められているのかがあまり大事にされていないようにも感じています。地域にある劇場が、不安を持っておられる方にどうアプローチして、それをどう解決に導いていくのか。地域の課題をどう表面化させどう解決に導いていくのか。公立の文化施設は、住民にとって開かれた場でありまして、そこにどんな「場」をつくるかによって、地域への効果が発揮されるのだと感じました。

こうした「場」は、障害のある人だけや高齢者のためだけの場ではなく、いろんな方々が将来にわたってかかわりが築ける、文化芸術を用いて関係性ができる「場」になることが求められているのではないのでしょうか。

また、そうした「場」での活動が、そこにかかわる人の生き方や考え方に良い変化をもたらし、更なる関係性が築いていけるのではないのでしょうか。

(谷委員)

村尾さんの話の中で、多様な方にこまめに意見聴取することの重要性を感じることができました。私は日頃から取り組んでいます居場所づくりや、様々な方のかかわりを得て取り組む地域づくりにおいても、徐々に多くのいろんな方々が支え合えるような仕掛けが必要と感じておりまして、それぞれの人がかかわりを持てるような工夫をしています。また、社会的処方についての話では、関わることができる、役割を感じることでできる環境づくりが重要であるということに感銘を受けました。

最後に許される信用について、という話も全くそのとおりだなと感じました。

以上です。

(中崎委員)

まずは、滋賀県では発表できる場が少ないのではないかと感じています。私たちの団体が公演をする際、会場が取り合いになることが多く、より多く発表できる場所や機会ができるとういのではないかと感じています。

また、施設では厚生労働省が推進する工賃を上げるが第一になりますので、絵がうまく

書ける人や歌がうまい人等、そうした才能を日常の作業では何も生かせないのです。そこで、先ほどの発表の場などを多く設けていただくことで、余暇として取り組んだ芸術活動の発表ができることになり、才能に気づいてもらえるきっかけにもなるのではないかと感じます。

最後に、大学生の方々の活動について。施設等での活動に大学生に参加いただけるシーンがありますが、大学生は卒業するとそれまでの関係が途切れてしまいます。

関係する人が途切れると、例えばボランティアで芝居のスタッフをしてくれる方が減って、芝居自体の開催が難しくなるなど、活動に制限が出てきます。障害者等の芸術活動を進めるうえでは、大学生がより関わり活動が継続できるような「場」づくりが必要ではないかと感じています。

（廣部委員）

私も事業を展開している中で、事業を支える側の人員確保には苦勞しています。

また、私が取り組んでいる事業では、喫茶店の一角を活用して事業展開していますが、そうした場所とうまく経済面でリンクできていく仕組みづくりができないだろうか日々考えています。お互いに win-win の関係性が築いていけないだろうか。そこから地域や社会に関係性を広げていけないかと考えています。

そうした中で、太下座長が指摘された「人」が重要になってきます。

活動が起こる「場」に常に人がいて、障害者や高齢者、地域社会などとの連携や関係性を築くための取組を進める企画力のある人、文化芸術活動を通じて人と人、人と社会との間をつなぎ・取り持つ人が非常に大事であると感じています。そうした人がいることで、地域とのかかわり方に非常に影響を及ぼすものと考えています。

（山下委員）

やまなみ工房でアートセンターを建てたきっかけは、この施設を通して、もっとたくさんの人と互いの存在を知り合いながら、感情が渦巻く場所にしたい、人が人を呼び込む場所にしたい、目的があろうがなかろうが行ってみよう期待が高まる場所にしたい、ということからでした。

近年、年間5千人近くの方がお越しになりますが、お越しになられた方には、施設内の創作工房を含めすべてご案内しています。よって、施設の利用者はいろんな人と出会うことでいろいろな刺激や関係性が生まれているのだと思っています。

私はこの施設・「場」を、施設の利用者やスタッフ、周辺地域の住民も含め、いろいろな『好き』が詰まった場所にしたいと思っています。食べる、つくり、みる、音楽を聴く等に活かされるような『好き』が詰まった場にしたいと考えています。

障害者だけの場所であるだけでなく、そこに住む人や活動する人、あらゆる人が関係性の持てる場所が「場」をつくるうえで最も大切にすべきことなのではないでしょうか。

(田端委員)

今年、近江八幡を舞台に近江八幡芸術祭を開催します。このイベントでは、地域で受け止める体制をつくっていかうということもこの芸術祭で試みていますし、発達障害の人との鑑賞体験など、多くの人の鑑賞体験の場にもなるような工夫や、介助ボランティアを地域の人と一緒に取り組むなど地域を巻き込んだ企画の実践を進めることとしています。

さて、前回の会議で、拠点機能を持った「場」をコントロールできる人が必要であるといった発言が多くあり、地域で地道に活動している人にも目を向け、つながりをつくれる人を芸術監督やアートマネジャーにしていくようなことを想起していました。

今日の大塚さんの提案をお伺いし、アーツカウンシル機能をつくっていくことが大事なのかなど。障害福祉の観点からアーツカウンシルをつくろうという動きは他ではないのでしょうか。

また、いろんな人のところを回る時に、文化施設との結び直しが必要ではないかとも感じています。

アイサとして今年度文化施設を回っていますが、オープンアーツネットワークでも文化施設に対してのアンケートで、障害のある方に対して文化芸術活動の相談窓口があるかとの質問に、窓口なしと回答した県内施設が多くあります。一方、文化芸術団体に話を伺うと、文化施設によくしてもらっているとの話もある。

文化施設として相談窓口を置くことはないが、実は対応できているといった実態もあります。文化施設として対応できていることに自らが気づいていないという実態があります。

そうした、気づきを、第三者を介して文化施設にもたやすための取組も必要ではないでしょうか。

また、前回、教育との連携の話もありましたが、学校の先生の中には取り組みたいと思っておられる方は必ずいると感じています。滋賀県膳所高校では、2年生の美術の時間を使ってアール・ブリュットについて考える機会を設けています。たまたま美術の教諭がアール・ブリュットについて知見を有している方であり、関係者ともつながりがある方なのでできている面があります。県が拠点を設けることで、いろいろな先生に広がりができるのではないかと感じます。そうした観点からも、拠点を設ける意義があるのではないかと感じます。

(太下座長)

障害者芸術の推進のためにアーツカウンシルを設けるということは非常に面白いのではないかと思います。

私も資料を用意しています。「福福連携」というテーマです。

認知症は理性・記憶をつかさどる領域にダメージを受けた状態であるといわれています。一方で、感情をつかさどる機能は比較的保たれていて、感動に刺激を与えることで認知機能が保たれるのではないかとされています。演劇的アプローチからは一定の効果が確認されています。であれば、障害者芸術、いわゆる障害のある人が情動のままに、生のままに創作した作品が認知症の方に効果があるのではないかと考えるわけです。そこで、アール・ブリュットの作品を鑑賞するワークショップを開催することがすごく意義のあることではないかと考えるわけです。

この度、文化庁の補正予算において「文化芸術収益力強化事業」が設けられ、文化芸術により収益力を高めるモデル的な取組を支援する事業ができました。またこの事業を通じて社会との新しい関係性の構築に資する取組を示すことも期待されていると感じています。そこで今年度この事業を活用してアール・ブリュットを活用した認知症の方向けのワークショップに取り組みたいと考えております。滋賀県にもぜひご協力をお願いできればと思います。

(長津さん)

今日はありがとうございました。

劇場に必要な人材について、アートマネジャーはわかりますがメンターが入るといのはなるほど、と感じました。

また、アーツカウンシルについては宮崎での取り組みが参考になるのかなと思います。大学院で文化政策を学び、その後福祉施設で勤務された方がアーツカウンシルを展開されておられます。アートマネジャー的な資質とメンター的な資質の両方をお持ちの方が担われておられます。障害者芸術を中心にされておられることではありませんが、社会包摂の視点に立って事業を展開されておられます。

今日の会議でみなさんから「人」という話が出ましたが、いったいどんな人なのか、という問いがあると思いますが、両方の知見を有した人、ということが言えるのではないのでしょうか。どういう組織をつくるのかというよりも、どういう人と一緒に組織をつくるのが重要だと思います。ですので、人と人の関係性を構築していける仕組みや取組、組織作りが必要なのではないかと感じました。

ありがとうございます。

(村尾さん)

私自身、障害者に関する知識や文化芸術に関する知識を持っているとは思っておりません。しかしながら、住民自治を目指すことをしっかり取り組んでいこうと考えております。また、社会的に困難を抱える人が、文化芸術活動を通じて、それぞれの人が役割を持つ・感じてもらうことのできるような取組を進めていければと考えております。

今日、やまなみ工房での取り組みに触れ、只々感心するばかりでした。今日感じたこの感覚をこれから市民の皆さんに向けてどう言葉にして伝えていくべきか、考えています。ありがとうございました。

(大塚さん)

前回の会議でも場所と人の話が出されていましたが、滋賀県にはすでに場所も人もあって、その場所や人をどう結び付けていくかが本議論の答えではないかなと感じています。今いる人をどう生かしていくのかを考えることが必要なのではないかと思います。

また、滋賀県は文化担当課と障害福祉課の連携が他県に比べしっかり連携がとられて、行政が主導して進められているなという感じを受けています。そこでこれからは民間ベースにおいて取組が進んでいくことが期待されるのではないかと思います。民間ベースで連携が図られるよう、行政がきっかけを作ること仕掛け作りが場づくりになるのではないのでしょうか。

文化芸術にかかわる方々と障害福祉にかかわる方々とが交流するきっかけづくりを進めることで、関係する人が増えてくるのではないかなと感じています。

(太下座長)

これで、本日の議題は終了いたします。

ありがとうございました。

(田村課長)

締めのあいさつ